

～ 震 災 を 振 り 返 っ て ～

悪夢さめやらず

課税課 榎 本 功

グラグラグラ、ドシーン、ガチャーン。激しい揺れのたびに家がきしむ。家具が倒れ、物が壊れる音、ゴーゴーという不気味な地鳴りがいつまでも続く。1995年1月17日午前5時46分あの大惨劇の幕開けであった。

これまでの地震より、揺れが大きく長い。子供たちのいる隣の部屋へ行こうとするが、揺れのたびに足元がふらついて、思いど通りに歩けない。壁や柱に身体をもたせかけながら隣室へ入った。本や、机の上に置いてあった物が床に散乱している。子供たちに声をかける。停電しており、手元に懐中電灯も用意してなかったので、声でしか安否を確認する方法がなかった。元気な声が返ってきたので、まずは一安心。

その後も地鳴りの後には必ず揺れがくるので、その度に恐怖感に襲われる。什器はかなり壊れたが、朝食の時には、電気もガスも水道も使えたので、被害はあまりなかったのかと、この時はそう思った。

ラジオ、TVは刻々と被害の状況を報道し始めたが、まだ全体像は不明だった。が、いずれにしてもかなりの被害がでているようであり、早く出勤しなければと7時半頃家を出る。JR垂水駅までのバス道にかなり凹凸があったり、亀裂が走っていたので、バスは運行を中止しており、垂水駅まで歩く。途中の家では屋根瓦が落ちていたり、ブロック塀が倒れていたが、つぶれた家などは見当たらなかった。JR垂水駅に着いた時は、閑散としていたので、電車は走っているのかと思ったが、電車は運行中止で、通勤

客は出勤を控えていたのだと後ほどわかった。

須磨浦まで歩けば神戸高速のいずれかに乗れるだろう、もしだめでも、JR須磨駅まで行けばタクシーがあるだろうと、国道2号線を東へ向かって歩き始めた。途中で山陽が動いている様子がないのに気づく。JR塩屋駅を過ぎたあたりで東の方にJRの電車が止まっているのが見えた。やがて須磨浦通にたどりついた時、これまでの街の様子と一変したのに驚く。古い木造家屋が軒並み倒れている。非木造の家屋も大きく傾いているのがわかる。東の空を見ると黒煙がもうもうとあがっている。JR須磨駅で職場へ電話しようとしたが、いずれの公衆電話も不通。コーヒーでも飲みたいと、自動販売機の所へ近づくと全部故障。お目当てのタクシーなど一台もない。駅前の商店はほとんど傾いている。

家を出てから既に2時間経過していたが、仕方なくまた東へ向かって歩きだす。やがて最初の火事現場に遭遇。さらにJR鷹取駅を過ぎると、そこは修羅場であった。猛火があたり一面の家屋をなめ尽くしていた。折からの風にあおられて、新築間もないと思われる住宅も、容赦なく火魔は襲っている。消防車はあたりに見当たらない。居住者はなすすべもなく、ただ呆然と見ているだけである。東、西、南、北にも炎が見える。このままだと、いったいどれだけの家屋が焼けてしまうのか、恐ろしさがこみあげてくる。

火事の熱を浴びながら、ひたすら歩き続

ける。JR神戸駅前を通過する頃には、家を出てから5時間近くかかっていた。何か口に入れたかったが、もちろん開けている店など一軒もない。足が痛くなって、歩く気力も衰えてくるが、名谷から徒歩で出勤途中のT課長と出会い、なんとか三宮まで歩く。

三宮も変わり果てていた。目についただけでも、センタープラザ東館や交通センタービルがひしゃがっていたのにびっくり。やっと区役所にたどりついたら、午後1時半頃だった。家を出てから約6時間近く歩いたことになる。脚がつり、ひざが笑い、足裏が痛くて、動くのが億劫だった。

区役所の中は机が動きまわり、ロッカーは倒れ、足の踏み場がなかった。整理する間もなく、S係長から対策本部が一階の福祉事務所に設けられているので、すぐ行くように言われ、そのまま対策本部に入った。

対策本部の電話は不通で、本庁との庁内電話しか使えず、中央区の被災状況がつかめなかったが、TVが詳細に伝えていたので、初めて被災の全体像がおぼろげながらつかめた。電話が不通であったため、昼間は対策本部も比較的静かだった。

公衆電話は一階の1台だけ通話できたので、そこには長い列ができていた。並んで家へ電話してみると、朝使えた電気、水道、ガスのライフラインはみんな止まっているとのこと、特にガスの復旧は3月中旬になってしまい、2カ月間風呂に入れなくなるとは、この時には予想もしていなかった。

時間がたつにつれて、被災者の人が区役所に集まってきた。まだ毛布も食料もなかったもので、建物の中で寒さを凌いでもらうだけであった。夜に入ってから、少しずつ救援物資が届き始めた。出勤している職員はまだ多くなかったが、まちづくり推進課・地域福祉課・福利課・課税課・収税課の5課4班で、避難所へ救援物資を搬送することになった。

18日には電話も使えるようになり、いっきょに情報が入るようになるとともに、全国からの救援物資が昼夜の区別なく届き、対策本部は不眠不休となった。20日まで4日間徹夜が続いたが、救援活動に追われ、眠いとかしんどいとか言うヒマもないありさまだった。悪夢がさめないような毎日が連続する始まりであった。

震災時行動記録（1月17日～20日）

まちづくり推進課 池上理俊

◎1月17日

5時46分：東灘区の自分の部屋は、ほとんど全ての物が棚から吐き出され、本棚も倒れた。普段から地震対策として、就寝時に何か倒れてきても自分の所には何も倒れてこないようにしていたので、無傷で助かる。地震直後に電気・ガスの元栓を止めたが、懐中電灯が本棚の下に埋もれたので、室内の現状確認はかなり遅れ、外が明るくなる6時

30分ごろまで状況がわからないままだった。

周辺の無事を確認した後、役所に行く準備を行う。

7時00分：まず最寄りの東灘区役所に向かう。国道を通ったが、木造家屋の殆どが倒壊し、通行困難な場所も多く、救出活動が方々で行われていた。火の手も数カ所から上がっていたが、いずれも延焼している様子はなかった。国道は既に渋滞していたが、こ

これは所々ある倒壊家屋により通行が阻害されているもので、それ以外の所は流れているようであった。

7時15分：隣接の消防署は既に開いており、市民が列をなして殺到していた。一方東灘区役所は表の扉も開いておらず、西側の宿直さんのいる通用口に行っても中が散乱しているだけで、誰もいない。しばらく外から中をうかがうが、誰も出勤していないようであったので、中央区役所へ向かうことにする。長田区役所の職員1名もその時出勤しておられたが、同様に自分の職場に向かわれた。私は自転車置場から自転車を失敬する。途中、実家に寄って無事を確認。

8時30分：中央区役所に着いたときは、既に4,5名が出勤していたようで、1階に集まっていた。すぐに4階に上がり被害を確認する。まちづくり推進課の部屋は書類棚が倒れ、机がバラバラの位置になって書類が散乱していた。総務課も棚は倒れていなかったものの、同様の状態であった。

部屋内の写真撮影、通路の確保を行っている。総務課の脇田さんが出勤、次いで副区長が出勤される。副区長室の整理を行っている。地域福祉課の今村課長と森田、茶屋道両係長が出勤、課長から課の職員の安否確認の指示を受ける。電話での確認は意外にたやすく行える。ただ、土井係長、居川さんの2名のみ確認とれず、不安になる。確認後、1階に対策本部が設定されたとのこと。1階に下りて集合する。既に市役所と連絡を取るなど、本部設置に向けての準備がなされていた。今村課長から区内の被害確認の写真撮影の指示を受ける。

9時～ ：カメラ2台を持って街に出る。被害の全容を知らないため、何から撮ればい

いか判断に迷う。市内は既にカメラを持った市民が多数出ており、車の渋滞も始まっていた。特に民家の撮影には気を使った。区内を回った経路は概ね以下の通り。

区役所－小野柄通－そごう前－交通センタービル前－JR三ノ宮駅北側－琴ノ緒町－二宮町－加納町交差点－中山手1丁目－トアロード－大丸前－旧居留地－八幡通－磯上通－御幸通－小野柄通－区役所（正午頃に帰着。）

正午頃？：この頃には、財田課長、土井係長、居川さんも出勤される。他の方は出勤不能。しばらくは応対などを行っていたが、立ち上がりの時期で多くの人々が待機している状態であった。

13時頃？：人が3名必要だということで、志願する。遺体安置所の設営の指示が出る。遺体安置所そのものの運営は福祉事務所が行うが、安置所となる旧下山手小学校が廃校のため、区役所からも人員が出ることになる。区役所からは私、地域福祉課の小澤さん、課税課の島井さん、福祉事務所からは白井主幹、藤本係長などが向かう。

既に下山手小学校には避難者が集まっていた。しかし教室は一部を除いて閉まったままであり、開いている部屋もごみなどが散乱しているので、部屋の開放および清掃を行う。また、遺体安置所は2階の体育館を使用し、避難者が入らないようにする。また、本部を校舎中央の給食室横の冷蔵庫室（木造）に置く。避難者はこのころ既に数百名、最終的には500名ほどになる。なぜかみな1階に入り、2階以上に入る人はほとんどいなかった。また、200名ほどは運動場で焚き火をして寒さをしのいでいた。下山手小学校は廃校なので電気がなく不安だったが、夕方暗くなる直前に電気工事が終わ

り、ほっとする。

18時～：本部との連絡は殆ど不可能の状態が続き、連絡は福祉事務所の車に頼るのみであった。また、やむを得ないことながら食料の配給などはなかった。夜半になって水道局から水の配給があったが、廃校ゆえに受け入れる資材が少なく、絵の具のバケツやごみ箱を使って水を貯める有り様であった。また、食料は差し入れがいくつかあり、本部でまとめて配付した。本部から毛布が届いた時は配布をめぐる混乱がおきてパニックになりかける。

遺体は夕方ごろから入りはじめる。安置所の運営は福祉事務所、避難所の運営は区役所であったが、ここでは分担することなく協同して行っていた。体育館は非常に冷え込み、遺体に付き添っておられる方にはつらい環境だったが、毛布とわずかな食料を優先的に回す以外になすすべがなかった。

職員もわずかな食料を口にしただけで、一睡もすることなく安置所と避難所の運営に立ち回っていた。

◎1月18日

0時～：遺体は夜通し運び込まれたが、夜が明けて救助活動が再開されると運び込まれるペースが上がった。多くの遺体が毛布に包まれて床の上に直接安置している状態だったので、体育館のカーテンを引きちぎり、遺体の下にしく。

避難所は夜が明けて家に戻る人もいて少し落ち着く。昼ごろに福祉事務所の交代要員が来られたが、区役所の交代要員がまだなので本部に要請する。ようやく交代要員が来られたのは14時すぎだっただろうか。

14時頃：本部に帰ると人数・体制ともに

前日よりは整っていたが、要望・苦情が殺到し、混乱の度は増していた。ほとんどの要員は物資の上げ下ろしと配送の手配を行っており、私もその中に入る。具体的作業についてはほとんど記憶が抜けている。食事などのわずかな休息を除き、作業が深夜まで絶えることなく続いた。

◎1月19日

～3時頃：夜半ごろになってビール瓶に入った水が大量に届く。その量の多さとケースビール瓶の重さに、飲まず食わずの体が限界に近づく。途中で1本失敬して元気を取り戻すが、1時間ほどでそれも尽き、みなさんには悪かったが仮眠をとるために4階のロビーに向かう。既に土井係長が休まれていた。

6時30分：谷上課長に起こされる。わずか3時間だが、先程のフラフラとした感じはなくなっていた。さっそく荷物の上げ下ろしを行う。昼過ぎまで同じような作業が続いたのか、具体的には記憶がない。

15時頃？：誰からかは記憶にないが、海上自衛隊の飲料水と食料を第4突堤に停泊中の護衛艦から運ぶ指示を受けた。トラックを手配して、4突に向かう。到着すると護衛艦から荷物の上げ下ろしが行われており、それをトラックに積み込む。荷物の上げ下げの要員の隊員と共に区役所へ向かう。

区役所に到着すると、水を葺合総合会館に持っていくように指示を受ける。直ぐに区役所を出発したが、渋滞によりかなり時間がかかる。葺合総合会館では水の受渡し方法に本部との手違いがあって混乱が生じ、パニックになりかけた。やっと受渡しを終了したあとは、区役所に戻るが、上げ下ろし

要員の隊員を護衛艦まで送るための車を手配するのに奔走した。

20時頃？：最後に隊員を護衛艦まで送り届けたのは、暗くなってかなりたった時なので20時ごろであろうか。遅くなった事のお詫びと報告を隊長にしたいと隊員に申し出たら、護衛艦の中に招かれた。意外な事で驚いたが、ともあれ隊長にお礼を述べる。なお、護衛艦は「くまの」および「よしの」といい、横須賀から来たそうである。区役所に帰着後は再び物資の上げ下ろしを行った。23時～：23時になって一時帰宅が許される。自転車で実家に帰る。

◎1月20日

12時～：出勤、再び物資の上げ下ろしを行う。この日も泊まり込みで作業をおこなったが、具体的には記憶がない。

◎その他

地震当初の記憶はかなり詳しいが、2日目、3日目になると、記憶が薄れている。護

衛艦に行ったのも、もしかしたら18日の出来事だったかもしれない。

この後も続いた混乱の中での作業では、区長や課長など上司の判断を仰ぐことが出来るケースが、物理的に普段より極端に減っていた。つまりそれだけ自分自身の判断によって行動する必要があったわけである。事実、無理に上司の判断を仰ごうとするより、自分で即断して行動した方がうまくいくケースが多かった。また、上司にもあらゆる要望等が殺到しており、上司の負担を減らす意味でも、自分で判断することの重要性が感じられた。

しかし、自分より一人でも上席の人がいる場合は、その人に判断を仰いだ。その場合その上司が区長なみの判断を迫られる場合もあったが、ここでもそこで上司が即断された場合はうまく事が進んでいた。このように混乱している場合は、そこにいる最も上席の人が判断しなければならないように、普段から意識させておく必要があるのでは、と感じた。

地下駐で出会った人々そして人生

地域福祉課 土田 晃

その時、いったい何が起こったのかさっぱり分からなかった。これまで強烈な縦揺れを経験したことがなく、なかなか立ち上がれない。テレビがコードに支えられた恰好でコタツの上に落ちている。間にみかんが挟まって中身が飛び散っている。電気が来ていないようだ。懐中電灯であたりを照らしてみる。幸い大きな被害はないようだ。まずよかった。その時、区役所がどうなったか気になった。(ラジオが聞けると思いつか

なかった) 停電はいつ復旧する。早く点け。まだなんか。ようやくテレビがついた。何んちゅうこっちゃ。三宮周辺を映している。交通センタービルや市役所の4、5階がへしゃげてる。区役所の様子はテレビでは映らなかった。とにかく行ってみよう。車を走らせ山麓バイパスを抜けたら道路はうねっている、ビルは傾いて今にも倒れてきそう。フロント越しに眺めながら、恐る恐るすり抜ける。

地下駐車場に到着。エレベーター前のガラス扉が倒れ粉々だ。7階の事務所はもう目を覆うばかり。作事中でなくよかった。けどこの静けさは何んなんや。

いったい何をしたらええんや。防災マニュアル通りなら救援物資を担当することに。午後から救援物資が届きはじめた。次から次へと物資が着く頃からもう7階へ行かなくなった…。

○地下駐が地域福祉課物資班の仕事場となった。避難所に物資を届けはじめたころだった。区役所前でひとりの少女が尋ねてきた。『避難所に入れず、昨日から何も食べてない。日暮通の路上に家族といる。年寄りもいる。寒くてどうしようもない。』と泣きながら訴える。「ちょっと待っとき。」(毛布3枚を自転車に括りつけ、パンを手渡す)『兄ちゃんありがとう。これ一生忘れへん。私等があそこに居ること覚えといてよ。』「よっしゃ。とにかくこんな状態や。絶対行くからな。それまで頑張りよ。」と返事したが、結局行けなかった。今頃どうしてるやろう。ほんとに申し訳ない。

○ひとりの老人が現れた。『避難所に行きたいが寝たきりの婆さんがいて移れない。』『電気もない暗がりです3日間何も食べてない。何か分けてもらえないか。』(おにぎりとパンを持って帰ってもらう。)その後ボランティアに引き継いだ…。避難所に救援物資を配付＝災害救助の図式でよかったんやろか。老夫婦同様に事情があって、避難所に行けず必死に生きてる人々のことを思うと、確かに限界はあるが全国から寄せられた善意が、果してどこまで市民に伝わったのかと考えさせられた。

○深夜のこと、物資の仕分け中ひとりのおっちゃんが来た。『地震のニュースを見て、居ても立ってもおれんようになった。八尾でたこ焼き屋やとんやけど、ワシも性分で材料借金して買ってやっとな着いた。あったかいもんが喜ばれる思うてな。』『用意はできとんやが、ここで水だけもらいたいんや。それとどこの避難所に行ったらええ。』(立ち話の中で)『ワゴン車で女房と子供が寝とんやけど、ワシら別居しとったんや。女房と一緒に神戸行くかと聞いたら行く言うてくれたんや。これを機会にやり直そかと思うんや。』(ポリタンクに水入れて積み込んだ。)「皆んな絶対喜んでくれるわ。」

駆けつけてくれたおっちゃんに感謝。そして親子3人どうか幸せになりますように。

○造園業者の方から避難所に配ってもらいたいと鉢植えの花をいただいた。100鉢を学校を中心に配付した。公園緑化協会のトラックを借り、ボランティアの坂地君と区内を廻る。鉢にはそれぞれ激励のメッセージが巻かれていた。避難所に行けば苦情や注文が多いなか、一番喜ばれた救援物資でなかったか。“心を癒す救援物資”とでも言おうか。ある教頭先生は『避難所生活で身も心も疲れ切った中、こういう気配りが心を和ましてくれるんです。ほんとにどうもありがとうございます。』と。帰りの車中、坂地君「今日はええ仕事しましたね。」と言った。物を贈るだけでなく心を伝えることが大事なんやなあ。

○東遊園地の炊出し等で支援しているボランティア『麦の会』から、炊出し用の廃材を調達に行きたいとの要請を受け、「我等がユース号(当時大活躍いただいた)」で繰り

出した。あの頃磯上公園はすでに瓦礫が満杯状態で小野浜公園へと向かった。ダンプが頻繁に出入りする中、恐る恐る木材の集積場へ。薪に適当な廃材を探してると、ペンキの剥げた古い門柱を見つけた。それには「戦没者遺族会会員」と刻まれた門標が付いていた。戦後50年の節目に再び悲惨な目に逢おうとは思っても寄らなかったことだろう。余生を平和に暮らしたかったに違いない。家族の無事を祈りたい。(心の中で合掌)

生ゴミの上空を飛び交うカモメの群れがやけに白く鮮やかに映った。悲しかった。

○キリンビール京都工場から10t車で瓶詰めの飲料水が届いた。何百ケースあるのか。

床の高いトラックの荷卸作業は人海戦術でもきつかった。各避難所へ配達する一方で、朝から区役所前で通行人にも配り始めた。台車にカートン積んではスロープを駆け上がるの連続。忙しく動き回っている背後で若い新聞記者がカメラを構えていた。次は地下駐で物資を点検するようにシャッターを切っている。名乗らないので「対策本部で許可をもらってくれ。」と言うと、彼は(『ワシは新聞記者じゃ。真実を伝えるために写真撮って何が悪い。』と言わんばかりの顔で)私を睨み返してきた。その後何も言わずに出ていった。彼の立場も分かるが、あの時『手伝いましょうか。』の一言がほしかった。

恨みの“り災台帳”

市民課 山田 恒男

磯上公園で義援金の支給と共に、り災証明の発行が始まったのは、被災3週間後の2月6日からでした。大巾に予想を越えた市民に逃げ出したい毎日でした。

無理ありません、被災した市民にとって、義援金、ローンの借入れ、税の減免、全てり災の判定が前提になるからで、何とか早く証明をもらいたい、同時に、調査を急いだため、台帳に不備もあり、一部を半壊に、半壊を全壊にそう思うのはこれだけの被害があれば当然です。

中には「10万、20万の話をしてるんやない、雲仙で1200万、奥尻で490万一桁上の話をしてるんや」と怒鳴る人もあり、加えて被災以前に遡及して、市外、市内から転入、世帯分離しようとする人など……

9時から5時すぎまで、喧騒と狭い部屋での缶詰状態、水槽の金魚の様に酸欠です。

窓の外を見ては並んでる人の数ばかり数えていました。そして、今日一日頑張ろう、いつかは終わると思いながら。

時には恐い思いもしましたが(本当に恐い人も居ました)「そや、その元気が神戸を復活さすんや、もっと大きな声を出したらええ、それやないと立ち上がれへんで」心で声援を送るときもありました。試行錯誤の連続で、あれで良かったのかと今でも胸が痛むこともあり、休日に被災物件を気になって見に行ったこともありました。

り災証明により支給される義援金10万円は一人1000円としても、寄付してくれた人100人の思いのこもった大切なお金、本当に必要な人に届けたい、そんな思いが心の支えでした。

それにしても、最後まで私を悩ましたのは、押寄せる市民ではなく、「り災台帳」に

つきます。「愛しても、愛しても、愛し切れない恋だった」、歌の文句ではないが、合わせても、合わせても、合わせ切れないうり災台帳でした。り災台帳の事でイライラが募り、頭が変になりそうでした。やむを得なかったと思うが、住宅地図を台帳にしたため、実際の建物と時間的、空間的に誤差があり、照合の困難さ、特に、14000件にもなった郵便申請はそうでした。

そして、再調査、判定変更による膨大な地図修正です。台帳は最大で、東西、合わせて42冊もあり、毎日、事務終了後修正するわけで、1人2冊担当しても21人で「東部52ページ、Dの3半壊」…などと●・○・△と赤ペンで印を付けます。そして、土、日曜日の休日を利用して、42冊を2冊、4冊、

8冊と全部を突合します。合わしても、合わしても、合わない訳でストレスが高まり、正に恨みのり災台帳でした。

証明事務の終息と共に台帳も減り、1年後の今は市民課で東西、合わせて2冊の台帳で細々と証明発行をしています。

台帳の全ページが真赤に修正され、その1つ1つに、区役所、他部局、他都市職員、ボランティア、ガードマンなどみんなの苦労が込められているように思います。だから、磯上で仕事をした人、みんなに1ページづつ記念に贈りたい、そんな気がします。

最後に、戦争のような期間でしたが、多数の人と知り合え、良い時間を過ごさせてもらい感謝の気持ちで一杯です。

夢幻弁当

福利課 北風清光

1月17日昼頃、自家用車で中央区役所に到着する。区役所1階福祉事務所が地震災害対策本部となり、情報収集と区民対応を行う。しかし、情報が錯綜し、区内の被害状況の把握に困難を極める。

夕方、某課長から依頼があり、東灘区の淡路屋の工場へ、避難者のための弁当を約600個取りに自家用車で出発する。出発後、すぐに渋滞に巻き込まれる。43号線から中央幹線、山手幹線へ退避するも、すべて渋滞で50メートル進むのに30分、1時間と時間が消耗していく。交差点の信号は作動せず、警察官の交通整理もなく、車、人、自転車、単車等で混乱し、閉塞の状態である。どうにかこうにか王子公園駅の交差点までたどり着いたが、延々と渋滞が続いていたため阪急電鉄の山側の脇道に迂回する

が、家屋、電柱等の倒壊により道が塞がって、あちこちが通行止めである。

前進、後退の繰り返しにより山手幹線に戻るも、幹線は延々と渋滞している。仕方なく神若線へ回避する。大石川の橋の所に来ると、道路が陥没して橋と段差が生じ通行が難しい状態であったが、車の底を打ちつけながら通行する。JR六甲道駅が倒壊し、道路が塞がり通行が出来ない。東進後南下し、JR沿いの南側の道路を東進する。JR高架の支柱が倒壊し、架線が道路に垂れ下がっている。石屋川のトンネルをくぐり東灘区に入る。

ここは、私が住んでいた所であり、車を進めながら友達の家を見ると、ほとんどが倒壊している。友達の安否が心配であるが、連絡は後でしようと思い、車を進める。しか

し、この一帯の家屋の倒壊は酷い。

御影高校の前を通ると、被災者、負傷者等が続々と学校に避難している。ドアに負傷者を乗せて学校に運びいれたり、グラウンドで廃材を燃やし暖をとっている人がいる。

2号線の渋滞は、酷い。淡路屋に連絡するため公衆電話を捜すが、電話の前には人が列を作って待っている。電話をかけるには相当の時間を待つ必要がある。渋滞のためガソリンが少なくなり、弁当を持って帰れるか不安になる。ガソリンスタンドはどこも閉店休業のままである。引き返すか、行くか、迷うが行くことにする。

夜が来る。暗闇の世界である。光は車のライトのみである。特に、43号線の南側は暗い。暗闇の中の倒壊家屋は不気味である。暗闇の中から突然、人が車のライトに照らされたり、道路が陥没していたり、廃材が道路にはみ出していたりするため徐行を心がける。灘の酒蔵の倒壊も凄い。

淡路屋の工場の辺りに着くも、暗闇でなかなか工場を確認することは難しい。ようやく捜し当てた工場はシャッターが閉じていて真っ暗である。工場の側道を歩いて裏側に出ると、事務所はあったが真っ暗である。しかし、事務所の扉が開いていたので、声を掛ける。真っ暗な事務所から懐中電灯の光が灯り、社員の方が出てこられたので、用件を伝える。しかし、弁当はすでに東灘区役所に配送しており、ないとのことである。

中央区役所に連絡するため、電話を借りる依頼をするが、不通であり使用出来ないとのことである。仕方なく帰路につく。虚無感と脱力感があるうえに、渋滞とガソリンが心配で心が重くなる。渋滞の中、ガソリンももちこたえ中央区役所に到着する。

その日以後、物資の積み下ろし、避難所への物資の配送、義援金の支給等に忙殺される。

のんきな職員T

M. T.

ぐっすり寝入っていたそのとき、とてつもない異常を感じ、目を覚ました。まだ寝ぼけている。どうも建物全体が揺れているらしい。わが家に自動車が飛び込んできたのだろうか、胸の上に大きな木の箱らしきものが落ちてきた。「なんだ、どうしたんだ?」、暗くてハッキリしないが、たんすの上に置いていたスピーカーボックスらしい。建物はまだ大きく揺すられている。やっと理解できた。「これは地震だ!」こんな大きな地震は経験したことがない。わが家がつぶれる、「ああだめだ。」と諦めかけたそのときやっと揺れが止まった。わずか10数秒

間がこんなに長く感じたことはない。「やれやれどうにか建物は建っているな。」、まずは一安心。「大きな地震の後には、余震が来る。」という乏しい知識を思い出した。こうしておれない、家族をたたき起こしてすぐ屋外へ出さなければ。さてと、まずせがれの寝ている部屋をたたいた。もぬけの殻である。さて次の部屋、だれもいない、はてな?。「お父さん早よ出てこな危ないで。」という声に、あわてて屋外へ出た。自分以外は直後に全員既に屋外へ退散済である。少々なことではこんなに朝早く起きるはずのないせがれは「真先に屋外へ飛び出した。」と

言う。とてつもなく大きな地震だったのだ。———なんとのんきな自分か、やれやれ。———ひとまず屋外へ退散した。さてこれからどうするか。しばらく屋外で様子を見よう。しばらくすると余震があった。これで大丈夫だろう。ひとまず建物の被害状況を見よう。懐中電灯を探し出し、ぐるっと一回り。ずいぶんと物が散乱しているな。建物本体はどうやらとんでもない被害状況ではないらしい、やれやれ。「ううん、妙なところ（玄関扉下）から水が流れ出している。はてな?」。扉を開けると、足元に金魚が寝ころがっている。水槽が壊れて金魚が玄関土間へ投げ出されているのである。すぐ気づいていれば助かっていたらと思うながら、埋葬してやろうと拾い上げたら、なんと、びくびくするではないか。あわててバケツに水を用意して入れてやると、10数匹全てが生きている。気温が低かったので助かったのかな?。一安心した。しかし、このときどうも水道の出がおかしいと感じた。もう一度蛇口をひねってみると、ついに断水してしまった。ふだんは水道工事等で断水するとしても、なかなか断水しない（自宅は地域の中で低位置にあるため、本管内の溜まり水が結構利用できる。）のに、今日はすぐ止まっている。「そうか、地震で水道施設に大きなダメージを受けたな。こうしちゃおれない。今自分は地域の簡易水道組合の世話人をしている。すぐ復旧にかからねば。」。まず組合長宅へ急行した。「組合長、水出まっか。」 組合長曰く「うん、出るんちゃうか。」 組合長宅の蛇口をひねる。水が出る。「ううん?。おかしい。」なぜ高い位置にある水道が出て、低い位置にある水道が出ないんだ?。じっくり考える精神的余裕なし。わが家では出ない。ひとまず役員に連絡しよう。順次確認していく。ほとんど出ているという。

しかし出ないところがある以上、早急に原因をみつけだして、修理をしなければ。水源から順次水道管理設位置を追いかけてみるがなかなかわからない。道路に亀裂が走り、水が滲んでいるように見えるところを見つけた。これだ、大がかりな工事になりそうだなと思いながら準備にかかろうとした。ところが、そこより低位置でも蛇口から水が出ている。ここは違う。そのときやっと気付いた。今回は非常に短時間でわが家の水が止まった。「そうだこれはわが家の近くで本管が破損しているに違いない。」あわてて自宅近くまで戻る。なんとわが家から数10mのところまで本管がはずれ、川の中へザーザーという音を立てながら水道水が流れ出している。「ああ情けない、落ち着いて考えていればもっと早くわかったらうに。」と反省しながら工事にとりかかった。

「あっそうだ。職場へ出勤が遅れる旨連絡しよう。」232-4411、232-4000いずれも反応がない。しょうがないか、そのうち連絡できるだろう。まず工事。———まったく無責任な区役所職員である。やれやれ。———「これから仕事に行くわ。」と言って補修工事現場のそばを通過して勤めに出ていった近所の人が出ると戻って来た。「どうしたん?」「電車止まるとるで。この先の道も陥没して車やったら通られへんで。」と言う。そうか、電車が止まっているならあわてて出勤しなくともよかろう、やれやれ。———あーなんとのんきな。———3時間ほどかけてやっと修理工事完了。さて、朝から飯も食ってない。食事をして一休みしてから出勤することにしよう。———市街地での地震被害状況のことは全く考えていない。気楽な職員である。———わが家へ戻り、食事をしていたら、電話が鳴った。「もしも

し、「ああーやっとながった。あちこち電話しようとするけど、どこもつながらへん。初めてですわ。まだ家におったんですか。テレビ見てませんか？。市役所つぶれてまっせ。明治生命ビルも、交通センタービルも。あちこちで火災が発生してまっせ。はよテレビつけなはれ。区役所もきっとなつぶれてまっせ。」とM職員の声。このとき初めてテレビをつけた。いや実は電気がついた直後に地震速報等は少し見た。そんなに被害があるようには報道してなかったの、そのまま水道工事をしていたので、その後の報道内容はわからない。まだまだのんびりしたものであった。「うわー、こりゃいかん。」区役所へ電話を入れようとするが、つながらない。しかたがないので課長の自宅へ電話してみた。課長の奥さん曰く「ええっ！うちの主人まだ着いてませんか？。早くに徒歩で出かけたんですが。」「いやいや私まだ自宅にいるんです。区役所にいるわけではありません。」恐縮するばかり。なんとか奥さんが課長に連絡する努力をしてくれると言う。直後に課長から電話が入った。「自転車でも今すぐに来てくれ。人手がいくらあっても足りない状態だ。」。さあーこうしちゃおれない、すぐ飛び出そうとは思ったものの、まだ気持ちの上では全く緊迫感がない。さてどうして行こうか。自動車で行くと駐車場所に困るだろうな、駐車場料金が高くつくだろうなと考えた。(まだまだのんきに考えている。道路の渋滞状況なんて、とんと頭に浮かんでいない。街中では有料駐車場は営業しているものと考えていた。) まあー寒いけどバイクで行くことにしよう。

ひとまず当日は状況把握をして明日から本格的な業務をすることになるだろうな。着替えを持つわけではなく、食べ物を持つわ

けでなく、てぶらで家を飛び出している。家族には「夜には帰ってくるからな。」と言い残して。———ああーのんきな。———「家の中をまったく片づけてないんだから。ひとまず片づけてよ。」と妻から指示されたが、「ひとまず区役所の状況を見に行くだけだから、夜帰ってきてから片づけるわ」と言って飛び出している。まったく気楽な職員である。———ああーやれやれ、なさない。———有馬街道を下る。市街地が近づいてきた。空を見ると、黒くなっている。煙だ。テレビ報道のとおりだ。あちこちで火災が発生しているんだろう。まだ緊迫感はそのほどない。県庁近くまで来た。なんと大きなビルが横倒しになっている。小さな木造建物がグシャグシャになっている。うわー大変なことになっているのではないか。事の重大さに初めて気づいた。区役所にやっとな着いた、事務室はゴチャゴチャ。数人の職員が部屋の隅で困り果てた表情で座り込んでいる。さて何をすればいいんだろう？。どう行動すればいいんだろう？。まったくわからない？？？。それからは、訳がわからぬままに1年間があっという間に過ぎてしまった。あまりにいろいろなことがありすぎて、記憶も混乱している。随分と大勢の人達に出会った。いろいろな人に助けてもらった。あちこちで迷惑もかけた。まるで夢を見ているかのような1年間であった。Nさん、あなたは率先してまず自立が大切だと実践されましたね。Yさん、あなたはお父さんが寝たきりだというのに頑張っておられましたね。Aさん、あなたは地震で失業し、明日からの自分の生活について大きな不安があったでしょう。Nさん、Yさん、Aさんそれぞれに私的な苦勞があるのにもかかわらず、他の避難者のためにと、必死になって頑張っておられたその姿はいつまで

も忘れられません。あっ！そうだ。『鍋』のことも一生忘れることのない出来事の一つ

です。みなさんありがとうございました。「神戸の復興」はこれからです。

本当の優しさとは

収税課 中村道子

私は交通網の途絶のため出勤できず、公務員でありながら何故もっと早く動こうとしなかったのか悔いるばかりです。地震の日より6日目の22日（日）に出勤いたしました。関西電力の前を通った時、不眠不休の中必死で働いておられたのでしょうか。各地方の電力会社の車の中で疲れきった体を休め眠り続ける作業員の方々、救援物資をトラックに積み込んでいる若者達の姿、そんな中私は一步も二歩も出遅れて被害の状況を目の当たりにしたのです。これは水道・電気・ガス・電話といった生活の基になる復旧作業が昼夜行われている姿でした。

中央区役所として例外ではありません。災害対策本部には市民からの切なる電話が殺到しています。そんな中で私たちの係がした仕事は、全国からの救援物資やお弁当を避難所へ届けるため、避難所からの要望や人数の報告を受けることでした。中央区管内に設置された避難所は、小中学校・公共施設等 約90カ所3万人を超える人数でした。そうこうしているうちに全国から炊き出しをしてくださるボランティアの方々が続々と増えて、その方たちに避難所の紹介をするようになりました。炊き出しの内容はさまざまです。あたたかいご飯・手打そば・おでん・お味噌汁・ラーメン・豚汁・山菜ごはん・粕汁・カレーライスさらには栄養のバランスを考えてほうれんそうのスープ・まぐろのおさしみ・おぜんざい・甘酒、といった具合に冷たいお弁当だけの避難所には本

当に有り難いあたたかい真心のこもった炊き出しをしていただきました。避難所の食生活は本当にこれらの方々に支えられていたといえるでしょう。しかしこれは公の機関を通しての申し出のみであり個人で動いておられた多くの方々はもちろん含まれておりません。全国北から南から団体といわず個人といわず、そば屋の店主さんに至るまでの方々がすべて道具・水・食器さらにはテント・シュラフ・簡易トイレ等も合わせて用意し、渋滞する道路事情の中駆けつけて下さいました。ヘリコプターの便を使い、少しでもあたたかなものをと届けてくださった方もありました。特にまだ一度もあたたかなものの当たらない所へ配りたい、届けたいという申し出が本当に多かったと思います。すべて叶えられるわけではなく、避難所におられる人数と提供の数が合わず、やむなく他区へとお断りすることもありました。私どもの公としての対応をどのように避難所の方々が感じておられたのか、このことが大変大事であったにもかかわらず、知るすべもゆとりもないことがとても残念でした。そして中央区では電気は1月のおわり・都市ガスは4月のはじめ・水は4月中旬とようやく復旧したのです。今は本当に全国の皆様から多くのご支援を頂き感謝の気持ちでいっぱいです。

本当の優しさとは、賢さを身につけ人の悩みを察知し行動に移す強い心をもつこと。日ごろから基本的な価値観を確認し学習す

ること。——桜井よしこさんの言葉から。地域住民を自然災害から守る大きな責任は自治体にある。住民との関係をもっと緊密なものにする必要がある。日ごろの防災訓練がいかに大切か改めてわかったとある学者は指摘なさいました。

被災地域の人々ははじめ地元自治体、何らかの専門的知識を活かしボランティア活動を始めた方々は、災害のなんたるかをすばやく認識し、自らを奮い立たせ、あらゆる困

難の中でもいち早く駆けつけることができる人々だったのであろうと思います。私はこの認識の甘さを否定できません。あの時、こうしておけばよかったは災害には通じません。まだまだ未熟さを実感する震災体験でした。

地震から一年が過ぎました。被災者だけが心の傷を負い、この負い目に負けてしまわないよう、公共の支援と人々のあたたかい励ましを続けることだと思います。

震災後の記憶 — その一部

収税課 宮地 暁美

あの日から2日後の1月19日、初出勤した。家を出たのは夜明け前だった。まだ辺りは暗く時折通る車のライトと懐中電灯の小さな光だけを頼りにして、私は三宮の街を区役所へと目指した。

到着したのは午前6時頃だったと思う。宿直室で対策本部の場所をきき、1階福祉事務所へ入った。そこは何人かの避難者と数人の職員、NHKの取材者がいるだけで意外なほど静かだった。

中西課長（前収税課長）と今後について話をしたのち、出務者の把握と収税課の様子をみるため、3階へ行った。そこで私ができたのは、とりあえず動かせる机を真っ直ぐにただけで、散乱した帳票や誰の物か分からない文房具は、一度は片付けようかとしたがどこから手をつけたらいいのかわからず早々と諦めてしまった。

午前8時30分頃、再び対策本部に戻り避難所の名称、人数、場所の整理のため地図と一覧表を作成した。幾つかの資料を参考にするのだが、中でも地図作りは町名や名称だけでは場所が分からず時間がかなりか

かった。それは区役所に勤務していながら区内のことをほとんど知らずにいたためだ。その時間にもなるとまわりは鳴り止まぬ電話と大勢の人とで騒然としてきており、早く仕上げなければと気持ちがあせった。

午後4時30分頃ようやくその作業も終りほっとしたのも束の間、今度は地下駐車場及び付近にある救援物資の把握のためと呼ばれる。打ち合わせの後、菱田係長と物資の内容と数について確認するが、その種類と量に驚く。2人でもくもくと作業する間にも、次々に運ばれてくる物資とトラックの列がつづく。それら善意の気持ちを目にして受け止め、これからを励まされたのは私だけではないだろうと思う。

こうして私の1日目が終わった。帰宅したのは午後10時頃だった。

私達（収税課女性職員）は対策本部での仕事をいつしか当番制にしていた。その仕事は大きく分けて2つある。それは①避難所の人数と物資配送の連絡②電話・窓口対応である。だがそのほとんどは電話対応に費やされていた。安否確認や倒壊家屋の処

理、物資提供の申出、避難所に関してその他たくさんの問い合わせの声に、最初は満足に答えることができなかった。本庁その他各関係機関からの情報も入ってはきてはいたが、整理されていないものあり、またテレビ・ラジオ・新聞を見る暇もなく、これではいけない、なんとかしなくてはと思った。そこで少しでも情報をキャッチしようとするときから新聞の切抜きとメモを欠かさないようにした。また新しい情報と文書は次の当番者へ伝えあった。常に緊張感があったが不思議にしんどくはなかった。後から思えば対策本部での情報のデータベース化をはかるとか他部局の防災時の役割を確認するなど、毎日の中での反省すべきことは多いが、正直いってあの混乱の中では仕方がないと思う。

2月6日よりそれまでの仕事と平行して義援金の受付事務が加わった。平常業務も含め私達は3足のわらじを履くこととなった。

そこで初めて被災者の人と直接接する立場になった。うまくできるだろうかと不安だった。大きなトラブルはなかったのだがPRが足りなかったのか、申請資格やその他不備のために交付を受けられない人もあり、長い時間寒空の下、待ち続けていただいた上で断らなければならないのが辛いことだった。ここでは、記入方法の説明やときには代筆したり、といった繰り返しの仕事なのだが、できるだけ丁寧に接することを心掛けた。

またこの事務では区役所職員以外の応援で、保育所保母、他部局職員、自治労・他都市の方に助けていただいた。特に同じ場所で担当だった他都市の方には感謝の気持ちでいっぱいだ。交通事情も不便な中、早朝から大変だったと思う。事務の説明もそこそこにすぐさま受付時間開始をお願いすることが多く苦勞されたと思うが、そんな素振りも見せず最後には「頑張ってください」と逆に励ましていただいた。

1月17日以降、家に帰ればテレビでは震災のショッキングな映像と死亡者名が一日中流れるようになった。ところがそれらを目にしても何故か感傷的になることはなかったように思う。そこだけ感情が欠落しているようだった。忙しい毎日が淡々と過ぎていった。9月のある日、大阪南港へ出かけた。南港WTCの中にある展望台へ上ってみた。大阪の夜景はきらきらしていた。ふと目をやると不思議な景色が目に入った。誰かが線引きしたかのように暗い帯が西宮付近から西へ伸びているのだ。被災地とそれ以外を夜の灯が分けていた。その時私は初めて泣きそうになった。

あれから1年経った。あのときのことは私の中で次第に色褪せていき、今ではもう夢のような気がする。こうして段々、私も世の中もあのときを忘れていくのかもしれない。でも、これから語り残すべき事は多く、私のささやかな体験の一部をここに記すことも決して無駄にはならないと信じた。

今日も巡回班の一員として、愛車ラクー
ンに乗って、避難所・テント村の巡回訪問に
出る。

「こんにちは。中央区役所の寺尾です。」
声をかけて、テントの内に入って行く。ここ
にも何回足を運んだことだろうか。

いつもとは様子が違う。子供が寝ている。
横でお母さんが、じっと座りこんでいる。テ
ント内はすでに40度を超えていると思わ
れる。扇風機の音だけが耳に入ってくる。

「どうしたんですか。」

「子供がね、熱を出して。今日、学校を休
ませたんですよ。」

いつもは、テントのある公園で元気に遊
び回っているやんちゃなボク。ぐったりと
している。

「医者にはいったんですか。」

「はい。先生にはみてもらいました。注射
をうってもらって、薬ももらって来まし
た。」

いつもは威勢のいいベランメー調のお母

さんの声も湿りがちである。

これまでの仮設募集では、優先ランクの下
位にあったため、すべて落選となってきた。

「申し訳無い。クーラーのある仮設に入居
できていれば、ボクちゃんにもこんな思い
をさせないですんだのに。」

こちらの声がつまってくる。

テントの内ですぐ汗がふきだしてくる。しかし、
暑さはもう感じられない。

今、このときに、この私になにができるの
か。

（最終の仮設5次募集には申し込み期日まで
には必ず申し込みするようにとは何回も
言ってはきたが…この発表を今は待つしか
ない。）

無力感が…体が心が沈みこんでいく。

「早く元気になってね。」

としか言葉が出て来ない。

夏の暑さが、心の重さが身にしみこんだ
一日だった。